

つながりを 永遠に

～日本赤十字社が
結んだ絆～

vol. 7
全7回

被災地支援 原点は阪神の避難所

一発災1カ月後、初めて被災地に入りました。

東京での主演舞台公演が終わってすぐ、復旧直後の東北新幹線に乗り、石巻市を訪れました。日和山からの情景は今でも忘れられませんが「これが現実。できることをやらねば」と誓いました。

一阪神淡路大震災を経験しています。

自宅は兵庫県西宮市。避難所でうつむいていた人々が「著名人が

来た」との知らせが入るとみな喜び、顔色が良くなる様を見てきま



避難所で炊き出しをサポートする藤原さん。サインや写真を求める人にも丁寧に応じ、避難所は温かな空気に包まれた＝2011年4月12日、石巻市湊小

した。その後私は上京しデビューしましたが、東北の惨事を知った時は「少しでもお役に立てるならなんでもやりたい」という思いでいっぱいでした。

一支援で意識してきたことは。被災した方々一人一人の状況が違う中、「自分はしたら役に立てるのか」と考えていましたが、東北のどこに行っても温かく迎えていただき、私の方が励まされました。炊き出しをして餅つきをして、仮設住宅にも迎え入れて

日本赤十字社による被災地支援が生んだ人と人との「つながり」を追うシリーズ。最終回は赤十字広報特使としてはもちろんプライベートでも被災地を繰り返し訪れ、今も支援を続ける藤原紀香さん(49)のインタビューです。

女優 藤原紀香さん(49) 「『一人ではない』を伝えたくて」

もらいました。「みなが応援してくれている」「一人じゃないんだ」と感じてもらうことが大事だと思い活動してきました。

一部に「偽善」「売名」との心ない批判もありますが、気になりませんでした。なぜなら以前、パングラデシュのハリケーン被災地で支援に参加した際、現地常駐の日赤の看護師さんが「自己満足と思われてもいいのよ。今、自分のしていることが少しでも誰かの役に立っているのなら」と教えてくれたからです。以来、自信を持って行動しています。

一被災地発のグッズなどを愛用しています。

宮城県南三陸町の女性たちがハンドメイドしている「ミナ・タン・チャーム」という素敵なキーホルダーです。ものづくりを通じて生きる励みと正当な工賃を得てもらおうと服飾デザイナーの

芦田多恵さんが2013年に始めたプロジェクトです。私も日ごろから持ち歩き、自分のサイトでも紹介しています。プロジェクトにより縫製技術を身に付けたお母さんが「生きてて良かった。やり甲斐が生きがいに変わった」と話すのを聞き、涙が出ました。被災地には他にも意義深い取り組みが多く、引き続き応援していきます。

一防災についても持論をお持ちです。

ドラマで救急救命士を演じたこともあり、防災・減災の大切さをブログなどでも伝えてきました。大災害では救命士らによる「公助」が回らなくなり、当事者の「自助」が生死の分かれ目になります。先日も大きな地震があったように、災害はいつ、どこで起こるか分かりません。全国の人々が今一度備えを見つめ直し、家族で

避難先、連絡方法などを確かめ合うことが大切だと思います。それは生かされた人間の役目ではないかと思っています。

一新型コロナウイルス禍中の発災10年です。

現地の方にとっては、とても一言では言えない10年だったと思います。私自身、触れ合えた多く

の方々の顔が思い浮かび、様々な思いがこみ上げます。震災で家族を失った石巻の大切な仲間が「少し前までは元気を取り戻して『周りの人を安心させなくては』と思いこんでいたのが、今は『誰でも人は悲しみを抱えたまま、生きていくものだ』と納得するの」と打ち明けてくれました。私は、喪失感を抱きながら生きる人を優しく受け入れる社会を作りたいと切に感じました。今年も午後2時46分、黙祷を捧げます。今はコロナ禍で叶いませんが、またすぐに会いに行きます。どうぞ皆さんお元気でいてください。



東日本大震災の被災地を繰り返し訪れてきた藤原さん。被災地の女性が手作りしたチャームを今も持ち歩き、思いを寄せ続ける